


「学齢期の情報」

※以下の情報については、担当の相談支援専門員が太郎さんの過去のことを知る関係者を探し、情報を得たものである。

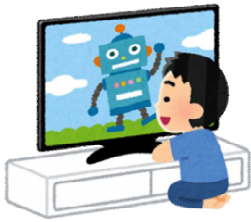
小学 6 年生の時に受けた児童相談所における判定状況	IQ68 といった記録はあるが、詳しい発達検査のデータは不明。診断名は「自閉症・軽度の知的障害」
自閉症・情緒障がい児支援学級小学 3 年の時の元担任からの情報	<p>小学 1～2 年生の時は普通学級に通っていたが、授業中落ち着きが無く、席を立てて教室内を歩き回り、突然怒りだし友達に手をあげて殴ってしまうことがあった。</p> <p>小学 3 年生からは、就学指導審議会を経て自閉症・情緒障がい児特別支援学級に移った。なかなか環境に馴染めない等もあったが、元担任の先生としては、試行錯誤しながら様々なやりとりやエピソードがあり、成長を感じることも多々あった。</p> <p>～エピソード～</p> <p>「太郎くんが小学生の頃は、色々なことに興味を示したり、意欲的だったり、好奇心はあり、活発な子だった。</p> <p>独特な考え方や My ルールなんかもあり、話をしたり関わったりする中で、特別支援の教師としてもたくさんのお子さんを学ばせてもらっていた。</p> <p>太郎くんは、『管理』と『指導』を受け付けにくいお子さんだった。提案を受け入れることはあるが、自分で決めて、自分で行動しているという状態が一番安定するようだった。」</p> <p>「そんな太郎くんとの思い出の 1 つとして、朝の会と帰りの会で『グッド&ニュー』という取り組みをやっていた。24 時間以内に経験したグッドなことや、新しい発見なんかを話す時間…。もちろんパスしても OK。太郎くんは、始めてからずっと『パス』していた。</p> <p>ある日、国語のテストをやり、答え合わせを求めてきたので採点したところ、85 点だったので、あと 15 点分をやり直すと 100 点になると提案した。太郎くんは、それを受け入れたのだが、正解が出せなかった。国語なので、問題文の『ここに答えが隠れているよ』と指をさして示しても太郎くんは教えられたくない、受け入れることが出来なかった。</p> <p>教えられたくないけど、分からないのでイライラがつのり、考えることもやめ、全機能停止状態になってしまった。</p> <p>教室のクールダウンゾーンに移動してもらい、落ち着いてもらったところぐらいで、こちらをチラ見している気配あり。そこで、紙飛行機を作って太郎くんが潜んでいるクールダウンゾーンに飛ばしたところ、すぐに紙飛行機が帰ってきた。</p> <p>その後、紙飛行機のやりとりを数回続けたところ、</p> <p>『これ…どうやって作るの?』という質問…。</p> <p>『習いたい?』と聞くと、『教えてほしい』と言う太郎くんらしくない返答が返ってきた。</p> <p>それから、5 機の紙飛行機をレクチャーを聞きながら作った。</p>

	<p>そしてその日の帰りの会の『グッド&ニュー』の段で、太郎くんは、『先生と作って飛ばして楽しかったです！』とはじめてスピーチをしてくれた。その時は、平然を装って『いいね』したが、太郎くんの少し恥ずかしそうな、そしてどこか誇らしげな表情を見て、涙が出そうになった。」</p> <p>と先生は、様々な感情や葛藤の中で闘っている太郎くんだが、『好きなこと』や『興味があること』には、苦手なことも出来るようになる力を持っていることを感じ、その後の学習や活動の参考となるエピソードであり、精一杯サポートしたいと思った・・・と当時を振り返りお話してくれた。</p>
<p>教育関係者からの情報</p>	<p>中学の太鼓部の顧問だった先生より、「中学一年の頃は、よくしゃべる子だった。張り切って何でもやりたがる子だった。幼い頃は、よく動き回る子だったと母親から聞いたことがある。」という話があった。</p>
<p>中学に入学後に母親と相談に行ったことがある専門機関からの情報(その後、年に一回のペースで数回その機関に通っている。離婚後もしばらく母親が連れて行っていた。</p>	<p>「母親がとても心配そうに太郎さんを連れてきて、『太郎はやさしい子です。でも乱暴なところがあるからと、学校から追い出されてしまったんです。何ができていないかを知りたいのです。』と訴えてきたので、印象に残っていますとのこと。(以下のことは、5年前の高等部二年生の時の状態について、聴取したことをまとめたもの。)</p> <p>【日付、時刻】 よく理解できている。</p> <p>【数、数量】 計算には時間はかかるが、二桁までの加減は大体良好。三桁になると難しい。買い物の時には、大きな金額の札で支払いおつりをもらっていた。</p> <p>【書字】 筆圧が弱く、読み取れない字も多く、線が一本抜けていたり、多かたりする。筆順は自分なりの書き方。</p> <p>【読み】 一、二行の文章はわりとすんなりと読むことができていた。難しい漢字でも知っているところがあった。読み違い(勝手読み)は目立っていた。</p> <p>【聞き取り】 一対一での指示は入る、集団における指示はほとんど入らない。特に周囲で誰かが話していると、その話にも気をとられてしまう。三人以上で話し合うことはかなりストレスになる。早合点してしまうことも目立つ。</p> <p>【話すこと】 慣れた相手だと、早口になる。順序立てて話をするのが難しく、何が言いたいのか周りに伝わりにくいことがある。</p> <p>【比較・推測すること】 予想することは苦手。どうすればいいのかを考えて、自分の考えを述べることも難しい。自分の意思を言葉で表すことはできるが、誰かに言われたことをまねているだけのことも多い。また、世間話をしている中で、ふとこんな話をしていたとのこと。</p> <p>～エピソード～ 小学生の時のある日、スーパーに行った際に、太郎が喉が渴いたと言ったの</p>

	<p>で、 「好きな飲み物持っただい！」 と私が声をかけると、太郎はコーラを嬉しそうに手に持ち、買い物カゴに入れました。私は太郎に、 「ん～、こっちの方が美味しいと思うな～！」と言って、麦茶を見せると「うん！」と何事もなく何も言わずに受け取り、カゴに入れました。</p> <p>あとから何気なく思い出したことだったのですが、父と買い物に行く時にはコーラやその他ジュースを買ってくることもあったのですが、その後私と買い物に行った際には、いつも飲み物は麦茶を選んでいたことに気付いたんです。</p> <p>私はその時、「好きな飲み物」と言っておきながら、何気なく麦茶を勧めたのですが、母としてどうだったかな～と少し考えてしまいました…。</p> <p>という話を聞かせてもらうことが出来た。</p> <p>その出来事が今現在の太郎さんにどう影響しているかは分からないが、太郎さんは、働くことや生活をする中で、人や環境等に影響されながらも、自分で考えて、悩んで、自分で決めるということを成功体験として重ねていきながら、太郎さんが何を考えどうしていきたいと思っているのかを、太郎さん自身が発信出来るような関わりや支援が必要なのだと、改めて相談支援専門員として感じた。</p> <p>(また、支援者として、利用者様の選択肢を狭めてしまうことや、誘導、決まりきった選択肢を与えてしまっていることはないかな～と振り返り、少し反省した…)</p>
<p>特別支援学校高等部の元担任からの情報</p>	<p>【指導上の留意点について】</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 同じような内容のことについても、理解できているときと、そうでないときの差が大きい。特に集団の場面では、話したことが届かないことは多かった。 ② 自分で、できないときに、なかなかヘルプコールが出せない。 ③ 教えられたことを忠実にやろうとするが、思った通りにならないと、何か理由をつけてやっていることを止めてしまうことがあった。 ④ 人に認められたい気持ちはともて強く持っており、虚勢を張ってしまうところが度々見られた。 ⑤ なかなか伝えたことが身につかない時に、繰り返し丁寧に声をかけていくと腹を立ててしまうことがあった。 <p>【支援目標を達成していく上で効果が認められたこと】</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 作業していく内容については、他の生徒がいない教室で、担任と一対一で見本を示しながら教示していくと、5～6 工程の内容でも対応できることは多かった。 ② やるべきことについての内容とその手順は、料理のレシピのように、写真を

添えて文章で示すと、自分で確認しながら取り組めることが多くなった。

お父さんからの情報



小さい頃を振り返りながらお父さんに聞いた情報。

小学生のころは、母親の気を引こうとする行動や、買い物の際にお店で『お菓子がほしい』『おもちゃがほしい』と涙を流したり寝そべったりして暴れることもあり、外出も大変だったとのこと。

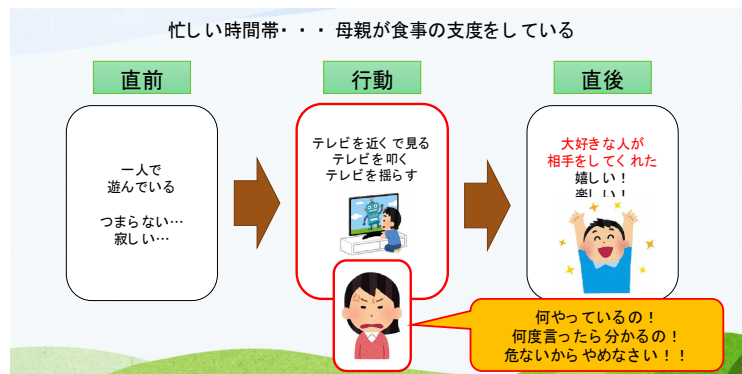
学校の個別懇談の時に先生に子育てについて相談すると、アドバイスをもらったことが今でも記憶に残っているとのこと。それから心も身体も成長し、少しずつ行動も落ち着いていったとのこと。

【相談内容】

- どうしてイタズラばかりするのか…
- 何を考えているのか分からない…
- なんて言うことを聞かないのか…
- どうしてわからないんだろう…
- 子ども(太郎)の気持ちが分からない

～エピソード～

特に母親が忙しくしている時間帯、夕飯の支度の時間帯に多く見られた行動で、カーテンの開け閉めを何度も何度も繰り返す。また、何度注意してもテレビ画面に顔を近づけてテレビを観たり、画面を手でバンバン叩いたりすることが多かった。先生からのアドバイスは、母親が忙しくなる時間の前に母親と一緒にいる時にはそのような行動がなかったことから、上記のような良くない行動をしていない時や、別なもので上手に遊んでいる時に、『褒める』ことを試みてはどうか？というものだったという。また、良くない行動をしている際には、危険が及ばない限り「相手にしない」ということを教えてもらった。相談支援専門員として、そのエピソードを整理し、まとめることで、学齢期の様子などから見られる今現在の太郎さんの状態把握の参考にさせてもらった。



怒ったり声をかけたりすればするほど、母親の顔を見ながらテレビを叩いたり揺らしたりしていた。

この行動は…

『減らしたい行動』



離れて座ってテレビを見る、他のおもちゃで遊びはじめる
この行動は…

『増やしたい行動』

父曰く、太郎さんは褒められたり認められたりすると、「意欲」「自信」「やる気」につながる子だった。

食器拭きは、水滴1つ残さず、とてもきれいにバーテンダーのように拭いてくれる。そのことを褒めると、毎日の日課になったことを思い出したという。また、洗濯機がぐるぐる回るのを見るのが好きであった為、洗濯機のスタートボタンを押すお手伝いや、片付けは苦手なところはあったが、掃除機が好きで長いと何時間も掃除機を引いてかけていたことから、掃除機がけのお手伝い等を提供していたという話が父から聞かれた。

「褒められる」「認められる」=『自信となりやる気につながりスキルになる』ことは、幼少期より蓄積された経験から成るものであることを確認できた為、今後の利用事業所等の関係機関にこれらのエピソードも含め情報共有したいと思っている。